

のであろう。

この詩が、一時帰郷（明治元三年）の際に詠まれたのなら、子どもたちとは、菊次郎と寅太郎であり、中央官庁から身を引いた明治六年（二八七三年）以降の作なら、寅太郎と午次郎のことである。西郷には、もう一人、西三とりぞうという息子がいるが、西南戦争で敗死したとき、まだ三歳になっていなかったから、除外されよう。

『論語』には、魯国に伝えられた『魯論』、斉国に伝えられた『斉論』、古文字で書かれた『古論』の三種類があり、前漢時代に、『魯論』を中心にして残りの二種類が合わさって、現在の『論語』になったと言われている。

寅太郎が後年、父西郷のことを回想して記した「臚おぼろに浮ぶ父の面影」という一文がある。西郷が子供たちに学問を教えようと、ずいぶん骨折った様子がうかがえて面白いので、次に引用する。

「私ら兄弟（自分と午次郎のことか）ならびに従兄いとこの隆準たかよし（西郷の弟吉二郎の長子）らは、父が沖永良部流調中、昵懇じっけんであった川口雪篷翁から、読書を授けられていたが、何れも悪戯いたづら盛りとて、却々雪篷翁の言う事を聞かないので、見るに見兼ねた父は、ぢや俺が一

つ教えてやろう、と約一週間ばかり自ら教授してくれたが、どうにも思うように行かぬと見えて、自分の子供は自分で教育するのはよくない、とまた川口翁に一任した。」

（田中万逸著『大西郷秘史』叢文閣）

「自分の子供は自分で教育するのはよくない」と言い訳めたことを言っているのがおかしい。さすがの西郷も、年端としはのいかない子供相手では、どうにもお手上げだったようだ。

#### 四、雪ゆきに耐たへて梅花麗ばいし——一貫す——

西郷は、子どもにとつて学問が大事なことは十分承知していた。だから、島妻愛加那との間に生まれた菊次郎が十二歳になると、文部省の留学生としてアメリカに渡航させた。わが子だけでなく、妹コトの次男宗介かんく（当時二十四歳）も、留学生として菊次郎に同行させている。さらに、宗介の弟勘六（政直。当時十六歳）も、同じ明治五年（一八七二年）に、アメリカ海軍兵学校に留学させている。その政直が留学する際に、次のような詩を贈っている。

示<sub>二</sub>外甥政直<sub>一</sub>

がいせいまさなお  
外甥政直に示す

一貫唯唯諾  
從來鉄石肝  
貧居生<sub>二</sub>傑士<sub>一</sub>  
勲業<sub>二</sub>顯多難<sub>一</sub>  
耐<sub>レ</sub>雪梅花麗  
経<sub>レ</sub>霜楓葉丹  
如能識<sub>二</sub>天意<sub>一</sub>  
豈敢自謀<sub>レ</sub>安

いっかん  
一貫す、唯唯の諾  
じゅうらいてつせき  
從來鉄石の肝  
ひんきよけつし  
貧居傑士を生じ  
くんぎょうたなん  
勲業多難に顯る  
ゆきにつた  
雪に耐へて梅花麗しく  
しもへへ  
霜を経て楓葉丹し  
もし能く天意を識らば  
あかあ  
豈に敢へて自ら安きを謀らんや

「はい」と答えて留学を承諾したからには、最後までやり通す  
それには、もともと鉄石のような堅い意志が必要だ  
貧乏暮らしは、かえって豪傑の士を生み出し  
手柄は、多くの困難を乗り越えてこそ立てられるのだ

梅花は、雪の冷たさに耐えてはじめて美しく咲き  
かえで  
楓の葉は、霜の厳しさを凌<sub>しの</sub>いではじめて赤く色づくではないか  
お前が、もしこの天のはからいに気づくことが出来たら  
どうして安易な生き方を自ら目指したりしようか(そんな生き方はしないはずだ)

○一貫…一つの態度を貫き通すこと。 ○唯唯諾…「唯唯」は、「はい」と丁寧<sub>二</sub>に返事をする  
こと。「諾」は、承諾すること。 ○鉄石肝…「鉄石」は堅いものの喩え。「肝」は、心、精神。  
○傑士…すぐれた人物のこと。 ○勲業…立派な功績。手柄。

この詩は、西郷の詩の中でも屈指のもので、とりわけ頷<sub>がんれん</sub>聯「貧居傑士を生じ、勲業多難  
に顯る」と、頸<sub>けいれん</sub>聯「雪に耐へて梅花麗しく、霜を経て楓葉丹し」は、名句として引用され  
ることも多<sub>く</sub>。

第一句の「一貫」は、『論語』から出た成語で、その里仁<sub>りじん</sub>篇に、「吾道一以貫之(吾が道  
は一以て之を貫く)」(わたしの道は一つのこと貫かれてい)とあり、衛<sub>えい</sub>靈公篇にも同様の  
語がある。孔子は、自分の生き方は「(仁で)一貫している」という強い自負を抱いていた。

西郷はこの「一貫」という語を詩の冒頭に置いて、外国留学を目前にした甥の心を鼓舞したかったのである。

また、同じ第一句の「唯唯諾」という言葉には注意を要する。この語からは、すぐに四字熟語の「唯唯諾諾」を連想するが、これは『韓非子』八姦篇に典拠があり、事の良し悪しに関係なく、君主の言におもねり従うことを意味する。

しかし、詩中の「唯唯諾」がこの意味だとすると、「一貫」とか、第二句の「鉄石肝」とのつながりがよくない。そこで考えられるのは、西郷は別の意味を込めてこの語を使っただけではないか、ということだ。

実は、西郷の「送菅先生（菅先生を送る）」と題する詩の中に、「一諾半銭慚季子（一諾半銭季子に慚ず）」（私がひとたび承諾しても半銭の値打ちしかなく、季子の一諾に対してはずかしい）という句があり、「唯唯諾」の意味を、この「一諾（ひとたび承諾する）」の意味に取ると、先の詩の意味がすっきり通るのである。

季子は漢代の季布のことで、『史記』および『漢書』にその伝記があり、「黄金百斤を得るは、季布の諾を得るに如かず」（たくさんの黄金を獲得するよりも、季布の承諾を得るほうが、もっとすばらしいことだ）（『史記』季布列伝）という言葉が見える。季布は、当時信義に厚

い人として知られており、彼が一たび承諾すれば、約束を違えずに必ず実行したという。

『蒙求』という唐代の初学者用の書物に、この季布の話を取り上げる際に、撰者の李翰が、「季布一諾（季布の一諾）」という表題をつけたので、そこから、一たび承諾したら決して裏切らない固い約束のことを、「季布一諾」というようになった。

以上のことから、西郷は、「唯唯諾」を「一諾」と同意で使っていると考えられる。つまり、西郷は、甥の政直に、異郷の地でひとり生きることは大変な困難を伴うが、ひとたび留学を承諾したからには、途中でくじけずに最後まで初志を貫きなさい、という励ましをこの詩に込めているのである。

第五句の「耐雪梅花麗（雪に耐へて梅花麗しく）」と第六句の「経霜楓葉丹（霜を経て楓葉丹し）」は対句で、苦難を経て、はじめて大きな成果が得られることをいっている。西郷は、とくに第五句をわざわざ別途抜き出して、政直に書き与えている。

昨年（二〇一六年）引退した広島カープのエース黒田博樹は、この「雪に耐へて梅花麗し」の句を、高校の書道の時間に習って感動し、自分の座右の銘にしたという。

広島カープの黒田投手は、目的こそ違うものの、政直と同じように故国日本を離れ、アメリカのメジャーリーグに単身渡って大成功を収めたわけだが、そこにはやはり大変な苦